

第21期考古学セミナー（2019年度）

—縄文時代後期の山形—

第3回講座

講義⑥

縄文時代後期の墓

—秋田を中心に—

三内丸山遺跡発掘調査委員会委員長

小林 克 氏

令和元年10月13日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

縄文時代後期の墓

— 秋田を中心に —

小林 克

1 はじめに

縄文時代中期から後期にかけては、社会が大きく変化した時代です。前期から続いた長大な住居が次第に小さく丸くなり、家族のあり方に大きな変化が現れました。村のあり方も変わり、一ヶ所にたくさんの住居が集まる形から次第に分散して生活するようになりました。こうした変化のなかで墓地および墓も変わってゆきます。秋田県内の事例を中心にその変化と意味を考えてみたいと思います。

2 県北、米代川流域の墓地遺跡（大湯環状列石・高屋館跡・伊勢堂岱遺跡）

大湯環状列石：鹿角市所在の国特別史跡です。昭和6年に発見され、26年、27年に当時の著名な研究者を集めて発掘調査が行われました。ストーン・サークル、環状列石の遺跡です。当時から祀りを行った場所か、墓地かの議論が戦わされましたが、発掘を伝える新聞報道からは墓地と広く知れ渡っていたことがわかります。

高屋館跡：同じく鹿角市所在の遺跡です。昭和63年、平成元年に農道建設に関わる発掘調査で見つかりました。石の残りは良くなかったのですが、大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡と同じく、列石外側の建物遺構が整然とめぐっていることがわかりました。農道建設で環状の遺構の半分が失われてしまいました。

伊勢堂岱遺跡：北秋田市鷹巣にある国史跡です。市内に建設された空港へのアクセス道路建設に係りて発見され、平成7年、8年に発掘調査されました。当初に見つかった環状列石を移築する計画でしたが、翌年の筆者らの調査で新たな環状列石が見つかり、遺跡は現地に保存されました。

3 県南、雄物川流域・日本海沿岸部の墓地遺跡

(八木遺跡・オホン清水 A 遺跡・ヲフキ遺跡)

八木遺跡：横手市増田にある遺跡です。昭和63年にほ場整備に関連して発掘調査されました。穴の上に石を組んだ墓や火葬された人骨が見つかり、また、厚い土層のなかからたくさんの土器・石器が見つかり、なかには棺とみられる埋められた土器もありました。また、県北部の環状列石外周をめぐると同じ建物遺構が5棟見つかりました。

オホン清水 A 遺跡：横手市にある遺跡です。平成15年にほ場整備に関連して発掘されました。土坑(穴)や竪穴遺構が186基、建物遺構が11基見つかりました。建物遺構のなかには、両頭の石棒(成興野型石棒)を納めた浅い竪穴遺構周囲に、4本柱を立てた例があり特別な人の墓と考えられます。

ヲフキ遺跡：にかほ市象潟にある遺跡です。平成元年、平成11年、平成12年に農道およびほ場整備に関係して発掘調査されました。後期の墓は平成12年の発掘で見つかりましたが、八木遺跡と同様に土器を埋めた墓や石を組んだ墓でした。

4 埋めない墓

遺体を地中に埋葬するのが墓のあり方である、というのは古今東西共通する考えです。実際、縄文時代以前の旧石器時代にも、そのようなあり方は行われていましたし、時代を問わず世界各地には地下に設けられた墓があります。しかし、住居のなかから人骨が出土する場合や、いったん遺骸を骨にしてから納めた土器も見つかります。亡骸を送るのには火葬、水葬、風葬など、さまざまな方法があるはずですが、考古学的に確認できるのは埋葬すなわち土葬のみです。しかし、発掘で見つかる地面に掘られた穴のなかには遺体を直接に納めた墓だけでなく、おそらくは地上ないし木の上などで葬送し、その後にお骨だけを納めたと考えた方がよいものがたくさんあるようです。日本列島に伝わる現代民俗、そして大陸民俗例からもその可能性が強いと思われれます。

5 縄文から繋がる現代の墓と葬礼

米代川流域の環状列石のある鹿角市、北秋田市に挟まれた大館市周辺には現代墓が環状に並ぶ墓地があります。現在まで18ヶ所を確認しました。環の大きさはさまざまですが、どれも墓碑銘が内側の広場を向くことは共通します。この地域特有の中央広場をもつ墓地の伝統、それは縄文時代後期までさかのぼるのかも知れません。

また、環状列石が登場する頃の東北地方北部にはいわゆる「狩猟文土器」と呼ばれる、具体的な図柄を描いた土器があります。世界各地の岩画に描かれる狩猟場面同様に、狩りの様子を描いたとするのが一般的な解釈ですが、土器の形には遺体をお骨にしてから納めるための専用土器と同じものがあります。また図柄も弓矢は描かれていますが、狩人である人物はない場合もあります。東北北部の葬俗には墓地に弓矢を掛ける儀礼があり、また、大陸北方民族の葬礼やアイヌのクマ送りでも弓矢を放つ場面があります。おそらく、縄文時代後期の「狩猟文土器」も、亡くなった人の魂を天上に送る葬礼場面を表現したもので、人物は送魂を促す儀礼を執り行ったシャマンと考えられます。

6 墓と家にみるジェンダー —縄文から現代につづく死「性」観—

墓は亡くなった人を葬り、その魂を送る場所ですが、同時に新しい命の生まれ出ることの祈願も象徴的に表現されていたようです。米代川流域の例と同じ頃の青森県側の環状列石、大師森遺跡や小牧野遺跡にはそれを見ることができます。縄文時代の性的原理を端的に示す立石と埋設土器の組み合わせです。この場合に立石は男性を、埋設土器は女性を表現するのですが、立石や石棒を男性とし、埋設土器(後代では鉢)や石皿(堅果や穀物を磨り潰す道具—後代では臼)を女性とする習俗は、縄文時代中期頃から始まり、現代にも繋がります。

そして、それらは魂を送る墓だけでなく男女一対を出発点として家族を営んでゆく家の表現にも組み込まれます。現代民俗では「塞ノ神」「火伏」「イエタマシ」などの名で伝わります。おそらくは東北地方でも縄文時代中期頃にこのような死と生、すなわち「性」に関わる観念、現代的な呼び名でいうなら「ジェンダー」の基本的な観念は成立し、それが現代まで繋がっている、ということが考えられます。

7 まとめ

発掘調査でわかる事実によって、私たちは何百年、何千年も以前の暮らしを知ることができ、考古学はそのそれぞれに年代的な根拠を与え、時代の差や地域の差でそれがどのように地域の文化として変化してきたかを教えてくれます。東北北部や北海道渡島半島にも広がる縄文時代後期に特徴的な環状列石は、そのようにしてわかる際だった例で、縄文時代の墓地としてきわめて特徴的です。

そして環状列石やその時代に特徴的な物象を考古学の範囲にとどまらず、民俗ないし民族学的な視点で見たときには、長く続く伝統が見えてきます。そしてそれは場合によっては東北地方だけでなく、列島の範囲を超えて大陸との系譜さえ追求できる可能性をもって示されます。縄文時代後期はおおよそ4,000年も前の時代ですが、その時代にあった文化、特に生死にまつわる精神文化と観念は現代にも受け継がれているのではないかと、墓はそれを教えてくれる大きな材料であると思います。